

# 序文

大谷由香

## はじめに

本書は二〇二二年九月〜二〇二三年二月に、龍谷大学ジェンダーと宗教研究センター主催で開催した「性なる仏教」ワークショップでの報告をまとめて発刊するものである。

「性なる仏教」ワークショップは、これまで成人男性主体で語られがちであった仏教の歴史を、女性や子ども、あるいはLGBTなどの性的少数者の視点で読み直すことを目的として、仏教学・歴史学・美術史学などをフィールドとするそれぞれの専門家が知見を持ち寄り語り合う機会として、六回にわたって開催された。

## 一、「性なる仏教」ワークショップ開催の意趣

すでに早くから指摘されている通り、仏典には女性差別的言説が多く残っており、仏教そのものが男性優位の社会で育まれた宗教であることは言うまでもない。仏典翻訳者・注釈者として名が残る女性は一人として存在せず、仏典は近現代にいたるまで、常に成人男性によって読み解き語られてきた。一九九〇年代にはフェミ

ニズム神学が日本に紹介され、源淳子氏らによってその手法を仏教学に応用する提案がなされたものの、その運動は大きな拡がりを見せることなく、かえって強烈なバックラッシュを生み、仏典の差別的言説に触れることとものをタブーとするような雰囲気や学内醸成してしまつたように思う。わたしは二〇〇一年に修士課程に入学して本格的な研究人生を歩み始めたが、その当初には、教祖である釈尊は差別などするわけがなく、仏典中に存在する女性差別的言説は、後世の弟子たちが語り継ぐ間に、男性主権の社会の趨勢を受けて加筆・改竄されたものであるから、これを研究することには何の意味もない、という風潮があつた。「信仰者の気持ちで、まずは經典に書いてあることは、どんなに突飛に思うことでも、まずは文字通りに信じなさい。その時代にはそれが当然として受け入れられていたのだから」と教えてくれる先生が、同じ口で經典の女性差別的表現については、「文字通りに受けとるな」と言う。空気を読まずにそのことに触れると「うるさい女」扱いをされて居場所がなくなるような感覚があつた。差別は決して個人の悪意に帰せられるものではなく、そう行動させる社会構造の中で醸成されるものである。仏典内の差別的言説が、仏典が作成された社会構造の探求材料としてでなく、ブツダや宗祖の権威失墜の材料としてしか扱われない研究現場は危ういのではないか。

一方でわたしにとって研究近接分野にあたる日本史学界隈では、一九八四年に大隅和雄氏と西口順子氏を起人とする「研究会・日本の女性と仏教」が発足し、一九八九年にはシリーズ『女性と仏教』全四巻が刊行された。上記のような仏教学界の風潮にすつかり染まっていた私が、この動きを知つたのは、もう研究会もとつくに終わってしまった二〇一〇年代に入つてのことだったが、このとき、多くの若手研究者の手によつて、仏教活動に加わる個別の女性像が、史料に即して明らかになつていったことは、わたしにとって衝撃的であつた。仏教学内で女性救済理論として提示される「変成男子」などの思想が、男性を基準としたもので、やはり差別の思想であることが男性研究者によつて語られることも新鮮であつた。仏教学で女性が語られるとき、それは個人名ではなく「女性」という大きな概念でしかなかったのにも関わらず、ここでは実際に仏教とともに生きて死んだ個人としての女性の足跡が明らかにされていた。確かに仏教の信徒として悩み歩んだ女性が歴

史上に存在していたことを、このときのさまざまな研究成果によって知ることができたことは、わたしを勇気づけた。また一方で、こうした取り組みに仏教学からの参加研究者がいなかったことを、とても残念に思った。仏教学の知見が加われば、もっとクリアになった問題もあったと感じたからだ。

「性なる仏教」ワークショップは、こうしたわたし自身の個人的体験にもとづいて発足した。報告者の多くは、わたしを含め、これまでスタンダードな仏教研究、いわば成人男性が執筆した文献を研究対象としてきた中堅研究者だ。国内の仏教学界隈において成人男性以外の個人を対象とする研究は、いまだほとんど存在しない。これは前に示したように、教義研究の対象となる仏典の翻訳者・注釈者が男性に限られているという史料の制約が大きい。しかし、その他の研究方法の模索さえ行われてこなかったのは、学界そのものの男性優位の風潮が色濃く反映された結果ではないかと思う。どの時代のどの社会にも、女性は存在していたし、子どもも、老人も、障害者も、同性愛者も、身体的特徴と性的自認が異なる者も、重い病気に悩む者も、介護者も、犯罪者も、差別される者も、さまざまな個人が存在していて、それらの個人と仏教との関わりがあったはずなのに、教義研究上では、彼らは健全な成人男性を主要モデルとした「一切衆生」という大きな概念の外縁に、うすばんやりとおさめとられて、顔のない「その他」としていわばひとくりに扱われてきた。社会構造の中で弱い立場にあるマイノリティな彼女たちを主体として、仏典注釈者として権威的立場にあった男性個人が、彼女たちにもどのように手を差し伸べたのか、あるいは全く手を差し伸べることはなかったのか、教義研究の上から語ることも可能なはずだ。このワークショップでは、そうしたマイノリティを主体とする研究方法を探り、開示していくことを第一の目的とした。

古典研究を下敷きとして現代的な問題を扱おうとするとき、「現代の価値観で史料を読む」という批判を浴びがちだ。その時代をよく知り、その時代の特性を踏まえた史料読解を行うことは古典研究の前提である。しかしその方法論と問題意識は分けて考える必要があるのではないかと思う。「差別が当然だった時代の差別発言を、現代の立場から批判することには意味がない」とも言われがちだが、個人を尊重しようという現代に

生きる研究者だからこそ、その発言が差別的であることに気づくことができる。その時代という限界に存在した差別性を認めていくことは、むしろ古典研究者にとって重要な仕事ではないかと思う。当時には差別と認識されず、当然とされていた行動や発言であっても、被差別者は現代人と同じように傷つき、やり場のない思いと諦めを強いられていたことに変わりはない。そのような存在があつたことを前提として、その時代を明らかにしていく必要があるだろう。

一方で彼がその時代の限界のなかで、最大限の平等を実行しようとしていたことは嘘ではないのだから、発言の差別性を認めた上で、会通・解釈して彼が伝えたかった仏の真意を伝えていくことは、現代に生きる宗学者の仕事だろうと思う。難癖をつけて差別が存在したことを隠蔽することに、どのような意義があるだろうか。しかし実際には現代の問題意識から仏教研究を行うこと、仏典の差別的言説を開示していくことそのものに嫌悪感を持つ人は研究者内にも多く、また特に女性差別を真面目に取り扱う人には、男女問わずある種の「色」がつけられる風潮が現在も存在していて、ワークショップ登壇者は、それぞれに大なり小なりの覚悟と勇気が必要だっただろうと思う。わたしの趣旨を汲み、参加してくださった登壇者の方々に、心から賛辞と謝辞を述べたい。

## 二、本書の構成

「性なる仏教」ワークショップは、花園大学人権教育研究センター、浄土宗総合研究所「浄土宗の平等思想とLGBTQプロジェクト」、龍谷大学世界仏教文化研究センター（応用研究部門）の共催のもと、以下の日程で行われた（所属は報告当時のもの）。

第一回「性の超越と仏教」 二〇〇二年九月十日（土）

### 研究報告

サッチャーナンディー（龍谷大学）「律蔵に記載される「性転換」した人々——上座部の比丘尼僧伽復興に

関連して」

岸田悠里（比叡山延暦寺叡山文庫）「転変する性」

大谷由香（龍谷大学）「鎌倉時代の転女比丘尼」

座談会 司会…大谷由香

第二回「仏典を生きる女性たち」二〇〇二年十月一日（土）

研究報告

野呂靖（龍谷大学）「我を抱き、接吻せよ」―『華嚴経』の女性像と明恵思想―

村上明也（駒澤大学）「仏性と女性―法蔵『梵網経菩薩戒本疏』を手掛かりとして」

座談会 司会…大谷由香

第三回「浄土真宗で語られる女性」二〇二二年十一月十二日（土）

研究報告

岩田真美（龍谷大学）「真宗史における女性」

小野嶋祥雄（龍谷大学）「浄土真宗における母親像」

座談会 司会…大谷由香

第四回「ルッキズムな仏教」二〇二二年十二月十日（土）

研究報告

河上麻由子（大阪大学）「歴史史料にみる、美男子と仏教」

大谷由香（龍谷大学）「僧侶の美醜」

大島幸代（中之島香雪美術館）「玄奘イメージの系譜」

座談会 司会…大谷由香

第五回「中世女性の苦と救い」二〇二三年一月十四日（土）

## 研究報告

南宏信（佛敎大学）「墮地獄の諸相——女性が墮ちる地獄」

前島信也（国際仏敎学大学院大学日本古写経研究所）「写経と女性」

座談会 司会…工藤量導（浄土宗総合研究所）

第六回「中世日本の僧と家族」二〇二三年二月十一日（土）

## 研究報告

坪井剛（佛敎大学）「中世における「僧の家」の形成とその特質」

板敷真純（中村元東方研究所）「僧の妻の系譜、坊守の系譜」

座談会 司会…大谷由香

当初ワークショップは、たとえば女性や性的マイノリティなどについて説かれた史料の紹介や、これまでの研究史などを紹介し合い、それについてコーヒーでも飲みながら気楽に話し合うという趣旨だったが、コロナ禍にあつてコーヒーを飲みながらというわけにはいけなくなり、また始まってみれば登壇者各自の熱意が強く、重厚な研究報告をしてくださったので、せつかだから書籍化しようという流れになった。ただし本来の趣旨ならびに登壇者への要望は前に述べたように、史料紹介や研究史紹介だったため、場合によっては原稿化が難しかったものもあり、大きく改稿したもの、また論文ではなくコラムとして文章化したものもある。また本書はできるかぎりワークショップ当時の構成を章立てとして生かしたが、編者の視点からみて内容的に集めた方がよいだろうと感じたものについては、勝手ながら構成を改め、また同じ理由により順番を入れ替えた。性の問題は多岐にわたる。以下にそれぞれの章の意図を説明し、本書の簡略な見取り図としたい。

### Ⅰ 女性が出家すること／女性がさとること

第Ⅰ部には、特に東アジア仏敎において女性の仏道修行がどのように扱われ、実践されてきたのかに触れる

二篇の論考を収めた。議論の前提を含めて紹介したい。

仏典に紹介されている比丘尼（成人女性出家者）の誕生譚は、いずれも釈尊が比丘尼誕生を喜ばなかったことを伝える。初めて比丘尼となったと伝えられるのは釈尊の養母であるマハーパジャーパーティーで、彼女は釈尊に何度も出家を願ったが却下され、弟子である阿難による取りなしによって出家を許された。いくつかの律蔵には、阿難がこのとき「大徳よ、もし女性が、如来の説く教えと規則に準じて出家したならば、預流果、一來果、不還果、あるいは阿羅漢果「といったさとり」を得ることができると尋ね、釈尊が「できる」と答えたので、そうであるならば養育の之恩ある彼女を出家させてあげてほしいと頼み込んだと伝わる（パーリ律・『四分律』『五分律』など）。つまり釈尊は自身の教えにしたがって修行をしたならば、女性であつてもさとりを得ることを認めていて、だからこそ嫌々ながらも女性の出家を許した、というのが様々な仏典に共通して伝わるところだ。

こうした「女性もまたさとりを得る」という言説を信じて、これまで多くの女性が出家して比丘尼となり修行生活を送つたはずだ。しかしこれまでこれら出家女性の具体的な修行のあり方などが論じられることは極端に少なかった。巻頭の大谷由香論文は、出家するための入門儀礼である「受戒」に着目し、仏教伝播にともなう比丘尼受戒の実態を具体的に考究するものである。受戒は同性の先輩出家者が最低十名必要であると律蔵に規定されている。しかし布教のための長旅は女性にとっては危険極まりなく、その十名の先輩出家者を揃えることが、比丘尼の場合は可能であつても、比丘尼の場合には非常に難しかったことが往々としてあつたであろうことが想像される。規定の先輩比丘尼十名を揃えて正式な受戒を行うことが出来ない場合、どのような教義を下敷きとして、どのような受戒によつて比丘尼を誕生させたのかを明らかにした。後に紹介するサツチャーナンデー論文にも関連するが、南方の上座部仏教界やチベット仏教界では、比丘尼受戒の伝統が途絶えて久しい。比丘尼僧伽の復興は出家修行を続ける女性たちの悲願であるが、教理的問題があつて正式な比丘尼僧伽の復興は難しいとされている。本稿が比丘尼僧伽復興のための一助になることを期待して執筆したものである。

また「女性もまたさとりを得る」という言説とは裏腹に、「女性はさとりを得ることはできない」という言説もまた、仏典のいたるところに見ることができるといえる。「女人五障」などは有名で、仏滅後数百年のうちに成立したと考えられる『施設論』（玄奘は翻訳するにあたって、仏在世時の成立と主張している）には、男性には実現できて、女性に実現できないことがある理由を、以下のように説明している。

女性たちは善の力が劣っていて弱く、（中略）女性には「善によって行動を」強制する力がない。（中略）また女性は生まれつきの素質がない。ただ男子だけが善の力を成就することができるからである。（中略）このような理由で、女性は転輪聖王にはならず、帝釈にはならず、梵天にはならず、魔王にはならず、縁覚のさとりを得ることなく、仏の最上のさとりを得ることがない。（大正26・521上）

つまりは体力だけでなく、女性は心の力も男性に比べて弱く、このためにさとりを得ることがないと説明される。こうした考え方は、大乘仏教にも引き継がれており、『法華経』提婆達多品に「女人五障」が紹介されることはあまりに有名である。本来的に仏になることはできないとされる女性の成仏を説く「変成男子」説や、女性の浄土往生を説く『無量寿経』の「女人往生」説もまた、女性の身体のままでは仏とすることができず、浄土往生もできないことを前提とした理論であり、女性差別的な前提から外れた主張ではないことが、以前から指摘されている。

しかし「変成男子」や「女人往生」は、もともとは「女性は仏にはなれない」という前提に抗って提示された女性救済のための理論だったはずである。これらの理論を掲示する経典の文句を、その後の注釈者たちほどのように受け止めたのか。村上明也論文（敬称略、以下同）は、特に『涅槃経』に説かれる、「女性の身体のままでは仏とすることができない」とも読むことができる経文が、東アジア仏教の一大テーマであった仏性論の文脈で考究された歴史を明らかにし、その中でどのように解釈が施されてきたのかを明らかにしたものである。経文が決してその文言のままに受け入れられてきたわけではない現実を明らかにしたもので、今後もこうした手法によって、経典の差別的言説の受け止めについての歴史変遷が明らかになっていくことを期待したい。

## II 性の超越と仏教

第I部で紹介したように、仏教では「女性」のさとりを認めるのか、そうではないのかということがしばしば問題となる。しかしまた別途、性というものは簡単に変化し得るものであり、生まれついでから死ぬまでの間、一定しているものとも限らないこともまた、仏典に示されたことである。第II部では、仏典にしばしば見られる性転換記事に着目した論稿を二篇紹介する。

最初の岸田悠里論文は、性が変わってしまった人の記事を網羅的に集めたものである。さまざまな仏典に、性の変更は当然起こるものとして紹介されていたことを示すもので、性転換という現象ならびに概念が、さまざまな教理考究活動にも影響を与えた可能性を示唆する。

次のサッチャーナンデー論文は、各律蔵における性転換記事を集めて比較検討するものである。これは比丘尼受戒の伝統がすでに途絶えて久しいミャンマーにおいて、比丘尼僧伽復興を目指すにあたり、教理的に有効な手段として、公的に唯一提示されたものが、「比丘からの性転換」であったことを契機として執筆されたものである。

「性なる仏教」ワークショップでは、大谷由香が別途「鎌倉時代の転女比丘尼」と題して、実際に鎌倉時代の日本で、一人の比丘・教円が、性転換して比丘尼となり、比丘尼僧伽復興を手助けした事例があることを報告した。しかしこれはすでに「鎌倉期律宗による比丘尼僧伽の再生」(『ハーバード美術館南無仏太子像の研究』中央公論美術出版、二〇二三年)として発表したもので、本書には収めなかった。そちらを参照願いたい。

## III 理想化される女性像

男性主権的社会においては、性的な汚れない慈愛に満ちた聖母こそが理想的な女性として描かれる。反面的に奔放な遊女もまた、表向きには批判されながらも理想的女性の一端を担う。男性主権的社会で花開き育ってきた仏教の文献には、見事なほどにこの両極端の理想的な「女性」ばかりが登場する。第III部では、こ

れら理想化された女性像に注目した二篇を収めた。

小野嶋祥雄論文は、浄土真宗本願寺派に属する僧侶による近代以降における法話において、「女性」がどのように説かれてきたかを論じるものである。男女同権を説きつつ、その内実として女性を「良妻賢母」像に押し込めるような口説が現代にいたるまで繰り返されていることを明らかにしたもので、その一因として話者の男女比率の偏りを指摘し、女性を個別の苦悩を持ち生活を営む人間として意識した語りかけの重要性を述べるものである。こうした提言が男性僧侶の立場から出されることを個人的に非常に有り難く思う。

また野呂靖コラムは、『華嚴経』『入法界品』に登場する遊女・婆須蜜多女（ヴァースミトラ）の説話が、東アジアの華嚴思想家たちによってどのように解釈されてきたのかを解説したものである。遊女が生々しく肯定する「抱擁」や「接吻」を、それぞれの時代・環境にある男性僧侶たちが「仏説」として真剣に検討してきた歴史は、これまであまり注目されてこなかった。性的な問題を教義学の上でどのように扱っていくべきか、聖的世界と俗的世界を架橋する萌芽的論考である。

#### IV ルツキズムな仏教

高僧伝などには、その僧侶の容貌について論評する記述がしばしば提示されている。世俗を捨てたすばらしい人格者として描かれる男性僧侶の容貌記述がどうして必要だったのか。また人々が僧侶に求める美しさとはどのようなものだったのか。第IV章では、男性美に関する論考を集めた。

最初の河上麻由子論文は、六朝時代には美醜を判定基準に含めた人物評価が、社会的評価と結びつけられるようになったことを明らかにし、僧侶であってもその評価軸から外れた存在ではなかったことを論じる。すなわちその後の出世に美醜が関係してくるからこそ、男性によって理想的な男性美が規定され、その基準に合わせて男性の容貌が論評されたのである。

続く大島幸代論文は、残された伝記等に容貌に関する記述が極端に少ない唐僧・玄奘を取り扱い、彼の理想

像が作成されていく様子について現存造形作品をもとに論じるものである。数少ない情報を基本としながらも、玄奘イメージに重なる別の理想的僧侶像と結びつけられながら玄奘像ができあがっていく様子を明らかにするもので、その時代・その地域の人々の期待を背負って成長してきた「美しい高僧」像を、現存する玄奘像に認めることができることを示唆する。河上論文で示された、男性によって作られた理想的な男性美は、まさに玄奘像に認めることができるだろう。

大谷由香コラムは、美貌を持つ僧侶がどのように説かれたのかを論じたものである。河上論文において美貌が社会的に優位に働く要因であったことが示され、出家社会であつてもその基準から逃れることができなかつたことが示されたが、しかし裏腹に仏教界では基本的に美貌はトラブルの種として語られ、美醜を離れる必要性が説かれる。にも関わらず、女性出家者の教誡者となる比丘には美貌が求められており、「どうせ女性は《ただしイケメンに限る》んでしょ」とする蔑視が律蔵にすでに前提として提示されている点を示した。

## V 仏典とともに生きる女性たち

いかに女性差別的な言説が仏典内に散見できようとも、女性たちは仏教を棄てず、仏典に指定された自身に可能な作善を積み、仏教を支えてきた。第V部では、これらの仏典記述内容にしたがつて生きた女性たちに着目した二篇を収めた。

前島信也論文は、經典書写の功德性に注目し、女性が願主となり、あるいは実際に女性自身が筆を手にとつた写経を、奈良時代以降、鎌倉時代まで網羅的に集成し、その奥書に示された願意を分析したものである。願意として示されるものに、女性特有の罪障滅罪や女性個人の往生・成仏の祈願を認めることはできず、多くは追善供養として書写がなされたことが明らかにされている。

南宏信コラムは、仏典内の地獄の描写に着目し、女性が女性であるということと理由として墮とされる「血の池地獄」や「不産女地獄」が登場するまでの歴史を先行する研究をまとめ概説的に紹介している。これら女

性特有の地獄の存在を人々に広める役割を担ったのが、比丘尼による絵解きを前提とした「熊野十界曼荼羅」であり、「立山曼荼羅」であることが指摘されており、女性自身によって女性に対する嫌悪や蔑視が説かれていったことが示される点が興味深い。

## VI 僧と家族／僧の家族

特に日本では、妻帯する僧侶はめずらしくなく、十一世紀後半から十二世紀には世襲による「僧の家」が形成されることが、すでに西口順子氏によって指摘されている。家族を持つ僧侶の生活実態はどのようなものだったのだろうか。第VI章は、中世僧侶と家族・寺院との関係に注目した論考を収めた。

坪井剛論文は、家族を持ち女犯する僧侶と、女人禁制・入寺制限を設ける権門寺院・大寺院との関係について論じたものである。「僧の家」が公然と形成される一方で、しかし女犯が不浄とされる価値観は依然として存在し続けたために、清浄性の喪失により修法の功験が失われることを恐れた権門寺院・大寺院の外に「僧の家」が設けられ、内には女人禁制等の入寺制限が設けられた可能性を指摘する。

板敷真純論文は、中世真宗に関する史料をもとに、男性僧侶と同等に布教の第一線で活躍した女性たちを紹介する。真宗では宗祖親鸞が公然と妻帯したこともあり、はやくから妻帯が当然とされ、道場主の妻が「坊守」と呼ばれて重要な役割を担ってきたことが知られる。彼女たちの具体的なはたらきが、世俗社会における「後家尼」と重複することを指摘するものであり、「僧の家」研究を一步進めたものと言えるだろう。

## おわりに

本書の企画構想のもととなった「性なる仏教」ワークショップは、盛況のうちに大団円を迎えた。回を追うごとに、研究者の参加が増えたことは幸甚であった。もとより、一編の論集に、「性」にまつわる多様な問題を網羅できると思わない。同性愛問題や、性器形状異常者への差別、稚児の問題など取りこぼした話題も多

---

いが、本書所収の諸論考の提示する新しい知見や視点が、次代の仏教研究のためのヒントになることを願うものである。合わせて土曜日開催のワークショップ運営を手伝ってくださった当時龍谷大学ジェンダーと宗教研究センター事務員だった池田登貴子さん、平綱雅彦さん、RAだった山本未久さん、山田直史さんに深くお礼申し上げる。

二〇二四年度前期、「性なる仏教」ワークショップは、本書にも寄稿している坪井剛氏・南宏信氏の発案により佛教大学オープンラーニングセンターにおいて全六回の行程で実施された。仏典における「性」にまつわるさまざまな差別や偏見から目を逸らさず、研究者として史料をもとにこれを検証していく営みが、これからも絶えることなく続いてほしい。「性なる仏教」ワークショップが、わたしの手を離れて、仏教系私立大学を中心にぐるっと一周り、二周りしてくれると嬉しい。

SAMPLE